

## 炳靈公信仰と『封神演義』

二ノ宮 聡

はじめに

炳靈公(図1)は東岳大帝の第三子と言われる神である。炳靈公の号は北宋の真宗より与えられた。一般に現在の中国民間信仰の中で炳靈公が祀られる機会はほとんどないと言える。現在の泰山の岱廟に炳靈殿は現存せず、その跡地には漢柏亭が建てられている<sup>(1)</sup>。現在では見かける事が少なくなった炳靈公であるが、明代を中心として盛んに信仰されていた。多くの説話や小説に名前を見ることができ、それがその現れであろう。特に明代の小説『封神演義』では炳靈公は黄天化として登場している。黄天化は話の中で主要な登場人物の一人であり、多く活躍の場面がみられる。これも『封神演義』が書かれた明代に炳靈公信仰が隆盛していた事の一端であろう。

この炳靈公は東岳大帝の第三子であるので、東岳大帝と同様に人の生死を司る神とされるが、時代によっては幸運をもたらすなど、様々な性格を持っている。また炳靈公の号が与えられる以前にも度々封号が贈られ、多くの名称がある。小論では、この呼称の変遷やその性格を検討し、『封神演義』を中心とした小説や説話の中に見られる炳靈



(図1) 北京東岳廟の炳靈公像

公の特徴を併せて考えてみたい。

### 一 泰山三郎と炳靈公

炳靈公について記載されている資料では、初期の頃では「泰山府君の子」や「泰山三郎」とされており、まだ炳靈公と称してはいなかった。この泰山三郎が登場する早期の資料では六朝期の『魏書』『段承根伝』がある。

段承根、武威姑臧人、自云漢太尉穎九世孫也。父暉、字長祚、身長八尺余、師事歐陽湯、湯甚器愛之。有一童子、与暉同志。後二年、童子辞暉、從暉請馬。暉戲作木馬与之。童子甚悦、謝暉曰、吾太山府君子、奉敕游学、今将欲帰。煩子厚贈、無以報徳。子後位至常伯、封侯。非報也、且以為好。言終、乘太馬騰空而去。<sup>(2)</sup>

この中で泰山三郎は段承根と共に欧陽湯の下で学んでいたとされている。泰山三郎が欧陽湯の下から去る時、段承

根に馬を請うと、段承根は木馬を作りこれに与えた。この事を非常に喜び、後に段承根を出世させてこの恩に報いる。ここでの呼び名は、「太山府君子」である。またその容姿は「有一童子」とあり、童子と描かれている。性格は、自身を受けた恩に報いるために、相手を出世させるなど相手に幸福をもたらす神とされている。また『古今類事』「盧瑩無官」での呼称は「泰山三郎」となっている。この頃には泰山三郎という名前が広く浸透していたのであろう。

盧瑩、兗州使院吏也。開宝九年、自城独婦行村路中、忽見旌旗甲馬。問之云泰山三郎出獵。瑩嘗聞泰山三郎見者就求官祿、多得如願。乃伏草中徐見錦袍少年。從者甚盛。瑩趨出拜告少年。曰、爾無官分与錢五百千。便過如飛。瑩後婦家因浚渠果獲錢。如所許之數。以此知一官皆有分定、不可妄得也。<sup>(3)</sup>

ここで、泰山三郎を見た者は官祿を得られるとの噂があり、以前、その噂を耳にした盧瑩は、道すがら泰山三郎を見つけ官祿を得られるよう願ひ出る。その後、望み通りに金銭を得ることができた。だが、泰山三郎は官祿を誰にでもみだりに与えるわけではなく、その人物の身分に見合った分の祿や地位を与えるのみである。ここでの泰山三郎の姿は、幸運をもたらす神の風貌に相応しく、金の服を身にまとい、引き連れている従者の数も多く華やかである。さらに、泰山三郎の容姿は「錦袍少年」との記述から分かるように年少の神である。

これらより泰山三郎の風貌は、年若い青年である。また自身が受けた恩に報いるため、相手を高位まで昇らせる。また相手の資質に見合った官祿を与えるなど、出世に関わる幸運をもたらす神とされていた事がわかる。だが『太平広記』「趙州參軍之妻」では幸福をもたらす神とは違う性格が描かれている。

趙州盧參軍新婚之任、其妻甚美。數年罷官還都。五月五日、妻欲之市求統命物、上於舅姑。車已臨門、忽暴心痛、食頃而卒。盧生号哭畢、往見正諫大夫明崇儼、扣門甚急。宗儼驚曰、此端午日、款闕而厲、是必有急。遂趨而出。盧氏再拜、具告。明云、此泰山三郎所為。遂書三符以授盧。還家可速燒第一符、如人行十里不活、更燒其次、若不活、更燒第三符。橫死必當復生、不來、真死矣。盧還如言、累燒三符、其妻遂活、頃之能言。初云、被車載至泰山頂、別有宮室、見一年少、云是三郎。令侍婢十余人擁入別室、侍粧梳。三郎在堂前、与他少年双陸、候粧梳畢、方擬宴会。婢等令速粧、己緣眷戀故人、尚且悲淚。有頃、聞人款門云、是上利功曹、適奉都使処分、令問三郎、何以取盧家婦。宜即遣還。三郎怒云、自取他人之妻、預都使何事。呵功曹令去。相与往復、其辞甚惡。須臾又聞款門云、是直符使者、都使令取盧家婦人。对局勸之、不聽。对局曰、非独累君、当禍及我。又不聽。母有疾風、吹黑雲從崖頂來、二使唱言、太乙直符、今且至矣。三郎有懼色。風忽卷宅、高百余丈放之、人物糜碎、唯盧氏獲存。三使送還、至堂上、見身臥床上、意甚凄恨、被推入形、遂活出。<sup>(4)</sup>

この「趙州參軍之妻」でも「見一年少、云是三郎」と記載から若いとわかる。また話の内容から察するに、少年や童子であるとは考えにくく、青年であろう。この話の中で、盧氏の妻を気に入る、命を奪い三郎自身の傍へ連れてきている。では時代が下ると、泰山三郎は人を殺すこともあり、生死に関わるとされるようになり、なぜ幸運をもたらすこととは反対の神とされるようになったのだろうか。これには泰山三郎の父の東岳大帝が関係していると思われる。泰山三郎は東岳大帝の第三子とされている。父の東岳大帝は冥府の神であり人の死を司るとされている。また泰山は人の生死に関する山とされている。このことから泰山三郎にも必然的に死に関係する性質が付与されるようになった

と考えられる。泰山三郎のそのような性格が『太平広記』『葛氏婦』に見られる。

兗之東鈔里泗水上有亭、亭下有天齊王祠、中有三郎君神祠者、巫云、天齊王之愛子、相伝岱宗之下、樵童牧豎、或有逢羽獵者、騎從華麗、儼若侯王、即此神也。魯人畏敬、過於天齊。朱梁時、葛周鎮兗都署。拳家婦女、游於泗亭、遂至神祠。周有子十二郎者、其姑美容止、拜於三郎君前、熟視而退。俄而病、心痛、踣地悶絕久之。拳族大憚、即濤神。有頃乃廖。自是神情失常、夢寐恍惚、常與神遇。其家懼、送婦往東京以避之。未幾、其神亦至、謂婦曰、吾尋汝久矣、今復相遇。其後信宿輒來。每神將至、婦則先欠伸呵噓、謂侍者曰、彼已至矣。即起入帷中、侍者厲耳伺之、則聞私窃語笑、遂巡方去。率以為常。其夫畏神、竟不敢與婦同宿。久之婦卒。<sup>(5)</sup>

ここでも三郎の姿は「年少」とあるが、話の内容から考えて、当然、青年の神であろう。この中で、三郎は廟を訪れた十二郎の嫁を気に入り、その女性の夢の中まで現れるなど執拗に追い続け、ついには死に至らしめる。「趙州參軍之妻」と「葛氏婦」の二つに共通していることは、気に入った女性を見つけると自分のものにするため、その者につきまとい、夢の中にも現れるなど執拗に追い続け、ついには三郎の傍に連れてくるために命を奪う。ここでの三郎のこのような性質は、東岳大帝と同じく死に関係する神とされているが、人の生死などの運命を決定するのではなく、三郎の目にかかった女性を傍に連れてくるために、突発的に殺してしまうことが多いようである。

この泰山三郎は皇帝から封号を与えられることでたびたび称号が変わり「威雄將軍」「炳靈公」へと号が変わっていった。『文献通考』に泰山三郎に威雄將軍の号が与えられたことについての記述が見られる。

後唐長興三年、詔以泰山三郎為威雄將軍。大中祥符元年十月封禪畢、親幸加封、令兗州增葺祠宇。經度制置使王欽若自言嘗夢睹神、又於廟北燔建亭、名曰靈感。<sup>(6)</sup>

威雄將軍の封号が与えられたのは後唐長興三(九三二)年とされている。この威雄將軍の封号は他の資料では「威」や「威權」ともある。

吳曾『能改齋漫錄』云、京東相伝、東岳天齊仁聖帝有五子。惟第三子後唐封威權大將軍、本朝封炳靈侯。哲宗元符二年六月、始詔四子、長為祐靈侯、次為惠靈侯、第四子為靜鑑大師、第五子為宣靈侯。

按今世俗止知有炳靈侯、余子無聞焉。第四子不封侯、殆歸於積氏者乎。

按『文獻通考』後唐長興三年、詔以泰山三郎為威雄將軍。此云威權、疑誤。<sup>(7)</sup>

これは兪樾の『茶香室統鈔』であるが、ここで「此云威權、疑誤」とあるように、「威雄」が正しい封号なのだろう。『統資治通鑑長編』の記載でも「威雄」とされている。

詔封東岳天齊仁聖帝長子為祐靈侯、第二子為惠靈侯、第四子為靜鑑大師、第五子為宣靈侯。以本路言、父老相伝岳帝有五子、惟第三子、後唐封威雄大將軍、皇朝封炳靈公、其余諸子并無名爵、故有是詔。<sup>(8)</sup>

北宋の時に炳靈公の号が与えられている。「三郎廟殘碑」に記載がある。

按文献通考、後唐長興三年、詔以泰山三郎為雄威將軍。宋大中祥符元年加封炳靈公、是碑有三郎等字、或即其廟碑与。姑附于此。<sup>(9)</sup>

ここで「宋大中祥符元年加封炳靈公」とあり、大中祥符年間に炳靈公の号が与えられたとされている。また『搜神記大全』には炳靈公の封号が与えられた事についての記載がみられる。

至聖炳靈王者、即東岳天齊仁聖帝第三子也。唐太宗加威雄將軍、至宋太宗封上吳炳靈公。大中祥符元年二月十五日封至聖炳靈王。<sup>(10)</sup>

『搜神記大全』では、大中祥符元年に「炳靈王」に封じられるとある。だが『文献通考』などでは大中祥符年間に与えられた号は「炳靈公」である。この「炳靈王」の封号は他の資料で見ることが少ない。

## 二 通俗文学にみられる炳靈公

炳靈公は様々な説話によく登場している。『水滸伝』第七十四回では、燕青と李逵が東岳大帝の誕生日に行われる奉納相撲に参加するために岱廟を訪れる。二人が岱廟の中を歩いている様子を描く中で炳靈公についての記述も見ら

れる。

次日、燕青和李逵吃了早些飯、分寸道、哥哥、你自拴了房門高睡。燕青卻隨了衆人、来到岱岳廟里看時、果然是天下第一。但見、

廟居泰岱、山鎮乾坤。為山岳之至尊、乃万神之領袖。山頭伏檻、直望見弱水蓬萊、絕頂攀松、尽都是密雲薄霧。樓台森聳、疑是金烏展翅飛來、殿閣樓層、恍覺玉兔騰身走到。雕梁画棟、碧瓦朱檐。鳳扉亮榻映黃紗、龜背綉簾垂錦帶。遙觀聖象、九旒冕舞目堯眉、近睹神顏、袞袍袍湯肩禹背。九天司命、芙蓉冠掩映絳綃衣、炳靈聖公、赭黃袍偏称藍田帶。左侍下玉簪珠履、右侍下紫綬金章。闕殿威嚴、護駕三千金甲將、兩廊猛勇、勤王十万鉄衣兵。五岳樓相接東宮、仁安殿緊連北闕、蒿裏山下、判官分七十二司、白驛廟中、土神按二十四氣。管火池鉄面太尉、月月通靈、掌生死五道將軍、年年顯聖。禦香不斷、天神飛馬報丹書、祭祀依時、老幼望風皆獲福。嘉寧殿祥雲香龕、正陽門瑞氣盤旋。万民朝拜碧霞君、四遠婦依仁聖帝。<sup>(11)</sup>

この中で炳靈公は「炳靈聖公、赭黃袍偏称藍田帶」とあるように、赤い長衣に藍田の玉の帯をしている。他の小説などに登場している炳靈公の容姿も同様に赤い服に玉の帯と書かれていることが多い。実際の岱廟にあった炳靈公像もこの姿をしていた事もわかる。

また「古今類事」に登場する炳靈公は、威雄將軍の号であった時期の記載と考えられる。



長興三年始、贈東岳三郎為威雄將軍。至建隆三年有段弼者、年八十善製笛。一夕有人云、威雄將軍追汝、遂入府見。一黃衣少年謂曰、知善製笛、可為作三五管。弼即時作三五管獻之。少年指最後者曰、此尤為妙。弼乞留少年曰、爾算未盡不可。弼曰、某在人間苦饑寒、不願活也。少年曰、但去將日給錢三百。後五年即召弼覓。後日果壳笛得錢如所許之數。雖大陰雨亦自有人來買後五年乃死。<sup>(12)</sup>

ここでは威雄將軍が笛作りの名人の段弼に笛の作成を依頼するために登場している。また、このように炳靈公が笛作りを依頼する話は馮夢龍の『古今小説』「史弘筆竜虎君臣の会」<sup>(13)</sup>にもみられる。

五代の唐の時に王一太と王二太という兄弟がいた。ある時、竜頭の形をした珍しい材料を手に入れたので、岱廟の殿下にある火の池に奉納した。奉納されたものを東岳大帝は炳靈公に与えた。炳靈公は康、張の二人に笛職人の閻招亮を連れてくるよう命じた。康と張は岱廟まで閻招亮を連れてきて炳靈公に面会させた後、小部屋を与え笛を作らせた。そのとき康、張が閻招亮に「ここは靈界なので、部屋から離れないように。部屋から出て、道に迷ったら帰れなくなる」と注意した。笛が完成し暫く経っても誰も来る様子がなく、閻招亮は部屋の外に出た。しばらく歩くと罪人の審判が行われるところに出くわした。聖旨が読み上げられ、罪人は、銅の胆と鉄の心臓に入れ替えられ、四鎮令公にされることとなり俗界へ戻される。その様子を覗いていると、鬼吏に見つかり慌てて部屋まで戻った。

その後、完成した笛を炳靈公に見せたところ大層気に入った。そこで炳靈公は、「お前の福を増し、寿命を延

ばしてやろう」といった。閻招亮はそれを固辞し、代わりに娼妓をしている妹の閻越英がその稼業から足を洗い、よい男と添い遂げられるようにとお願ひした。炳靈公はそのような心の持ち主はすばらしいとして、その願ひを聞き入れた。その後、康、張の二人に家へ送り返される途中、山の中腹で断崖絶壁の底へ突き落とされる。目が覚めると家のベッドの上であった。

炳靈公は奉納された材料で竜の形をした笛を作らせるために康、張の二人を遣わし閻招亮を連れてくる。二人が閻招亮に来るよう依頼する台詞は次のようである。

一個官員、有兩管龍笛薪材、欲請待詔便去開則個。這官員急性、開畢重重酬謝、便等同去。閻招亮即時收拾了作仗厮趕二人來。<sup>(14)</sup>

この言葉の中に「這官員急性」とある。これは閻招亮を早く炳靈公の下へ連れて行くために言った言葉であろうが、他の小説などに登場する炳靈公の行動を総合して考えてみると、「せっかち」な性格であったのかもしれない。そして康、張により閻招亮が連れてこられた先は泰山であった。そこで炳靈公に面会した後、笛を作る部屋を与えられる。この時、康、張が注意する。

閻招亮理會不下、康、張二聖相引去、參拜了炳靈公。將至一閣子内、已安薪材在桌上、教閻招亮就此開笛。分付

道、此乃陰間、汝不可遠去、倘行遠失路、難以回帰。分付畢、二聖自去。<sup>(15)</sup>

ここは康、張二人の言葉にあるように冥界である。泰山は死を司るとされているので、このように死者の審判を行っている場面に出くわしても不思議ではない。この審判では生前の行いを明らかにし、来世での新たな運命を与え送り出すなどする。また、この時裁かれていたのが後に閻越英が結婚する男である。

罪人の審判は東岳大帝に限らず、炳靈公が行うこともある。そのときは同様に生前の行いの善悪や運命などを調べ、その後の処遇を決定する。昆曲の「一種情」第九幕「冥勸（または炳靈公）」<sup>(16)</sup>にも炳靈公が冥界の判官として登場し、死んだ者と共に生きている者の運命がうまく行くよう力添えをする。

揚州前防禦吏の何厚には興娘と慶娘という二人の娘がいた。何厚の家の隣には官族の崔君が住んでおり、両家は親交が深かった。崔君には崔興という息子がおり、興娘と幼馴染みで幼いころに婚約し、金鳳釵をその証とした。崔興は父が仕事で遠くへ赴任することになり、それに随った。その後、十五年間音信がなかった。興娘は十九歳になっていた。しばらくして、興娘は病気で危篤になり、崔興が戻って来たなら、慶娘と婚礼を行ってほしいと遺言を残す。後に崔興が帰ってくる。崔興は両親が亡くなっていたので、何厚の家に世話になる。ある夜、慶娘と称す者が釵を持ち崔興を尋ねてくる。崔興はそれとなく面会することを断ったが、何度も訪ねてくるので、断り切れずに面会し、ついには度々会うようになった。後に家の者に見つかり、二人は逃げるように家を離れる。一年後、崔興は何厚に許しを請い戻ってくる。その一年の間一緒に暮らしていたのは興娘の魂魄が乗り移った慶

娘であった。よって何厚の許しにより慶娘と崔興は結婚し、興娘の宿願は果たされるのであった。

この中で炳靈公は死亡した興娘を裁く役人として登場する。興娘と判決のための問答の中で崔興との婚約の話聞く。そこで鬼判に命じ「姻縁簿」を取り出し、興娘の事を調べる。姻縁簿の記載では崔興の相手は興娘ではなく、妹の慶娘となっている。そのため興娘は、崔興と慶娘を婚約させるため、一年の期限で魂を慶娘に乗り移らせたのである。

ここでの炳靈公は死んだ者を審問をして、生前の行いを調べ、次の運命を決める。だが、訴えを聞き、その者の運命を調べ、本来あるべきようにするために力を貸すのである。どちらかという運命に積極的に関与しているように思われる。

また『醒世恒言』卷三十一「鄭節使立功神臂弓」<sup>(17)</sup>の炳靈公は登場した時の様子が他の小説とは少し違っている。以下は話の導入部分のようなものであり、張俊卿の紹介をしている部分である。この後も導入部が続き俊卿達が東岳へ到着してからの様子が描かれている。

さて東岳に到着すると各々休息をとった。三月二十八日の東岳の祭日になると十人の員外は東岳廟で参拝をした。張員外は炳靈殿に家宝の玉結連繚環を供え参拝した。参拝が終ると十人は東岳を歩いた。張員外は疲れたので、他の員外を先に行かせ休息をとっていた。すると斧や鑿の音が聞こえてきた。音のする方へ近づいてみると作業場があった。中をのぞくと七、八尺ある大男達が仕事をしていた。そこから飛んできた木屑を見ると家の蔵

にあった香羅木であり、父の花押も認められた。怪しく思い一人に訊ねると寺の中に通された。寺の中に入ると僧侶がでてきた。近づいて見ると、あの和尚であった。その和尚としばらく話をしてしていると、突然、雷鳴のような大声で「炳靈公参りました」と聞こえた。和尚に屏風の後ろに隠れるように言われ、その様子を覗くと、十数人の黄巾力士と共に一人の神が部屋に入ってきた。

張俊卿ら十人の員外は泰山に到着すると各々休息をとり、東岳の祭日になると東岳廟の参詣に全員そろって出かける。そこで炳靈公殿へ参拝も行っている。

至日、十箇員外都上廟来焼香、各自答還心愿。員外便把玉結連條環、捨入炳靈公殿内。還愿都了、別無甚事、便在廳下看社火酌献。<sup>(18)</sup>

東岳殿内を参拝する際、炳靈殿を詣でる事は一般的であったようである。また「玉結連條環」は張員外の母から渡された家宝であるが、そのような大切な物を納め参拝することからも、当時、炳靈公は厚く信仰されていたことの現れであろう。

その後、寺の中に通され和尚と話しをしていると突然大声が響き炳靈公が和尚を訪ねて部屋に来るが、その時の様子が以下のようにある。

和尚同至方丈、敝札分賓主坐定、点茶吃罷、不曾說得一句話。只見黃巾力士走至面前、暴雷也似声個喏、告我師、炳靈公相見。嚇得員外神魂盪漾、口中不語、心下思量、炳靈公是東岳神道、如何來這里相見。那和尚便請員外、屏風後少待、貧僧斷了此事、却与員外少敘。員外領法旨、潛身去屏風後立地看時、見十數個黃巾力士、隨着一個神道入來、但見、

眉单細眼、貌美神清。身披紅錦袈裟袍、腰繫藍田白玉帶。裏簌金帽子、着側面糸鞋。員外仔細看時、与岳廟塑的一般。<sup>(19)</sup>

このように十数人の黄巾力士を引き連れ炳靈公が入室してくる。その容姿はこれまでの他の説話と同様に美しい顔立ちをしており、赤い上衣と腰に玉を付けている。また「与岳廟塑的一般」とあり、当時の東岳廟炳靈殿にあった炳靈公像の形状このようであったことも分かる。また「只見黄巾力士走至面前、暴雷也似声個喏」とあるように、十数人の大男を従え、雷のような大声を発すことから、意外と荒々しい風体をしていたようである。ここで炳靈公は和尚の下へ助力を頼みに来たのである。

炳靈公道、此人直不肯認做諸侯、只要做三年天子。和尚道、直恁難勘、教押過來。只見幾個力士、押着一大漢、約長八尺、露出滿身花繡。至方丈、和尚便道、教你做諸侯、有何不可。却要凶王爭帝。好打。道不了、黄巾力士撲翻長漢在地、打得幾杖子。那漢嘆一声道、休休。不肯還我三年天子、胡乱認做諸侯罷。黄巾力士即時把過文字安在面前、教他押了花字、便放他去。炳靈公抬身道、甚勞吾師心力。相辭別去。<sup>(20)</sup>

この男は諸侯になる事を了承せず、それなら三年天子にして欲しいと勝手な事を言っている。そのため、これを説得できずに和尚に助けを求めに来た。和尚の助力により諸侯になることを認めさせ、礼を言い柄霊公は部屋を出て行く。

ここに登場する柄霊公は、位を授けるなど人の運命を決める事はこれまで通りである。だが諸侯になる事を説き伏せられず、僧侶に助力を頼みに来るなど、頼りない部分も見られる。

以上のように様々な小説にも柄霊公は登場する。そこでの柄霊公は、「以前に見られた「幸運をもたらす」や「人の妻を掠め取る」などといったことは見られなくなり、新たに「美しい容貌」や「冥界の判官」といった性格が見られるようになった。物語によって柄霊公の立場などは様々である。だが、その役割は概ね、冥界で死者の裁判を執り行い、その者の運命を決める。また、東岳大帝の子である。という二点が多くの小説で見られた。『古今小説』や『古今類事』では、柄霊公が自ら職人に笛を作らせることから、特に笛や音楽を好んでいたのかもしれない。

### 三 『封神演義』にみられる柄霊公

前述したように柄霊公（泰山三郎）は様々な性格が付された神である。明代の小説『封神演義』では重要な登場人物の一人として描かれている。『封神演義』で柄霊公が活躍する場面は多く、「勇ましい」「美しい容貌」といったことが特に強調されている。ここでは『封神演義』の中の柄霊公について検討したい。

小説『封神演義』は全百回の小説であり殷周革命を舞台としている。この戦争で周側に元始天尊などを代表とする「闡教」が、殷側に通天教主を代表とする「截教」がそれぞれ味方し、両軍の戦争が行われていく。この殷王朝と周

王朝の交代劇の殷周革命に仙道の戦いを結び付けている。

『封神演義』で炳靈公は黄天化として登場している。黄天化が炳靈公と最も端的に示されている場面は小説第九十九回である。姜子牙により行われる封神の儀式の中で黄天化は炳靈公に封神される。この黄天化は周軍の武將、武成王黄飛虎の長男である。この武成王黄飛虎は第九十九回で東岳泰山天齊仁聖大帝に封じられる。ここでも炳靈公と東岳大帝の關係と同様に武成王黄飛虎と黄天化という親子とされているのであろう。

また『封神演義』には、小説『封神演義』の他に、戯曲『封神演義』がある。小説『封神演義』と車王府曲本『封神榜』（以下、車本『封神榜』）を例にとりながら、黄天化と炳靈公の差異について検討していきたい。

殷軍と周軍の戦闘では多くの仙人や道士、武將が戦死する。黄天化と黄飛虎も陣亡してしまふ。小説『封神演義』の第九十九回から姜子牙により戦死した者を神に封じる「封神」の儀式が行われ、その中で両者の封神も行われる。封神の儀式で黄天化の封神が行われる。

爾黄天化以青年尽忠報國、下山首建大功、救父尤為孝養。未享榮封、捐軀馬革、情実痛焉。援功定賞、当存其厚、特敕封爾為管領三山正神炳靈公之職。爾其欽哉。<sup>(21)</sup>

これが『封神演義』で一番明確に黄天化が炳靈公とされている箇所であろう。では小説『封神演義』での黄天化はどのような人物なのだろうか。

黄天化が最初に登場するのは、小説では第三十一回「聞大師驅兵追襲」である。黄天化が父黄飛虎を助けるため下



山する際にその風貌が描かれている。

話説青峰山紫楊洞清虚道德真君止在碧雲床運元神、忽心下一驚。道人袖里掐指一算、早知黄飛虎有厄、道人忙命白雲童兒。清你師兄來。白雲童子即時請出一位道童、生的身高九尺、面似羊脂、眼光暴露、虎形豹走。頭挽抓髻、腰束麻縑、脚登草履、至雲榻前下拜、口称、師父、喚弟子那壁使用。真君曰、你父親有難、你可下山走一遭。黄天化答曰、師父、弟子父親是誰。真君曰、你父親乃武成王黄飛虎是也。今在潼関、被火龍標打死。着你下山、一則救父、二則你子父相逢、久後仕周、共扶王業。天化聽罷曰、弟子因何到此。真君曰、那一年我住崑崙山來、脚踏祥雲、被你頂上殺氣冲入雲霄、阻我雲路。我看時你才三歲、見你相貌清奇、後有大貴、故此帶你上山、今已十三載了。<sup>(2)</sup>

ここで「生的身高九尺、面似羊脂、眼光暴露、虎形豹走。頭挽抓髻、腰束麻縑、脚登草履」とあり、かなり大柄であり、眼光鋭いなどの容貌を知ることができる。

黄飛虎の身に災いが降りかかったことを知り、道德真君は黄天化に下山し、その後、周に仕えるよう伝える。だが黄天化は自分の親が誰であるかを知らない。さらになぜ青峰山で修行をしているかも知らない。そこで道德真君にそれらの事を訊ねる。道德真君の返答で、黄天化の父は武成王黄飛虎であること、また三歳の時に青峰山に連れてこられた事などを告げられる。

車本『封神榜』において黄天化が最初に登場するのは、第百十九回「行軍帳天化救父」である。ここでも小説『封

神演義』と同様に、陳桐に敗れ死んだ黄飛虎を助けるため下山する。その時に道德真君より黄天化の父は黄飛虎であることが告げられる。そして下山の際にいくつかの武器などを与えられる。

師父賜你先天寶、莫邪寶劍手中擎。此劍非金亦非鉄、乃是乾元寶一宗。變化無窮隨心意、你好替父報預冤怨恨。

回手又取降邦寶、小小花籃掌中擎。必須如是這般樣、破他邪寶很易容。賜你九還丹二粒、真能起死又轉生。救他

二人回陽轉、他算我、山人功德別當輕。

道德真君回身打石匣內取出法寶金丹、賜与天化、天化就手接過來、磕了一個頭、站將起來、將法寶金丹收在錦囊之内、復又跪在碧雲洞前、口尊、祖師、弟子還有一事不明、求老師指教弟子。我即是武成王之子、因何在此出家。求老師慈悲、与弟子說明。<sup>(23)</sup>

ここにおいて黄天化は「莫耶の宝劍」と「花籠」などの武器を授けられる。莫耶の宝劍は、小説『封神演義』では、敵將の陳桐を倒した際に、「非銅非鉄亦非金、乃是乾元練精。變化無形隨妙用、要知能殺亦能生」と説明が加えられている。一方、車本『封神榜』では、「此劍非金亦非鉄、乃是乾元寶一宗。變化無窮隨心意」とあるように、道德真君から授けられる時にも、その説明があり、敵將陳桐を倒す時にも小説『封神演義』と同様の言葉で説明が加えられている。また、どちらもその形状を詳しく説明しているが、どちらも莫耶の名に相応しい名劍であることがわかる。また、なぜ黄飛虎の子であるのに、なぜ道士として修行を行っているかと尋ねる黄天化の問いに道德真君が答えて言う。

石床上、真君見問將頭点、叫声徒弟細聽真此話至今十三載、那年訪友上崑崙。招展雲光往前走、見一股、殺氣冲空宇宙昏。撥開雲光往下看、慧眼遙觀細留神。卻是奶娘將你抱、正在花園閑散心。你那是才交三歲、見你神清貌超群、我看你、後來必有大貴処、非比尋常下賤人。山人動了慈悲意、忙遣力士与黃巾。平空伸下傘雲手、將你拘進洞中門。教你常把兵書看、学了武来又学文。我教你、撒豆成兵移山海、呼風喚雨請諸神。我教你、五遁三術人間少、燒練金丹救世人。算来足夠十三載、你到今年十六春。今日該把高山下、搭救天倫你父親。送他好把高關過、借兵回国把很伸。徒兒你、事完即刻回古洞、千万的、不可久恋在風塵。你父子、後来自有相逢日、那是叫你下山林。天機後話不可泄、久後自然遍見真。<sup>(25)</sup>

道徳真君が崑崙山を訪れた際、下界から氣配を感じてよく見ると黄天化を見つけた。その容貌に仙人になる才覚を見出し紫峰山まで連れてきた。その時ちようど黄天化は三歳になったばかりであった。その後、学門や道術を教え、十三年経ち、十六歳になった、とある。

このように『封神演義』で黄天化は十六歳の青年である。『魏書』に見られた泰山の第三子、『太平広記』趙州參軍之妻に登場した泰山三郎などと同様に若い姿で登場している。これらのことから炳靈公は若年の神として認識されていたことがわかる。

車本『封神榜』では下山した黄天化が周軍の陣營へ通してもらおうよう案内を請うている場面に、黄天化の風貌が描かれている。

且説飛彪聞曉這片言詞、連忙卻身跑出宮外、睜了睜、果有一個道童在門外站立。但見他頭挽雙髻、身穿紅道袍、腰系黃絨糸綯、水襪雲鞋、背後背定了一口寶劍、手提小小花籃、生得眉清目秀、面如敷粉、齒白唇紅、天生來的俊俏。<sup>(26)</sup>

その姿は、髪を二つに束ね、赤い道服を着て、腰には黄色い袋を下げ、雲のような靴、背に宝劍、手に花籠を下げている。眉目秀麗にして顔立ちがよい、とある。この中にある「眉清目秀」という言葉は、小説『封神演義』には見られないが、車本『封神榜』では、黄天化の登場ごとに書かれており容姿の美さが度々強調されている。

その後、小説では第四十回「四天王遇炳靈公」から第六十九回「孔宣兵阻金鷄嶺」の多くに黄天化は登場する。その中で戦いの場面で黄天化の活躍がよく見られる。特に前半部分では敵将の魔家四将との戦いなど大いに活躍する。第四十回では黄天化は魔家四将と戦うため下山する。

黄天化隨師至桃園中、真君伝二柄錘、天化見而即会、精熟停党、無不了然。真君曰、将吾的玉麒麟与你騎、又将火龍標帶去。徒弟、你不可忘本、必尊道德。黄天化曰、弟子怎敢。辞了師父出洞来、上了玉麒麟、把角一拍、四足起風雲之声。此獸乃道德真君閑戲三山、悶遊五岳之騎。<sup>(27)</sup>

下山に際して道德真君より二本の錘と玉麒麟という靈獸、さらに陳桐から入手した火龍標を与えられる。また周軍營に到着し黄飛虎と再開した時の様子は以下のようにある。

且說黃天化父子重逢、同回王府、置酒父子飲。黃天化在山吃齋、今日在王府吃葷。隨挽双抓髻、穿王服、帶束  
發冠、金抹額、穿大紅服、貫金鎖甲、束玉帶、次日上殿見子牙。子牙一見天化如此裝束、便曰、黃天化、你元是  
道門、為何一旦變服。我身居相位、不敢忘崑崙之德。你昨日下午山、今日變服、還把糸糸束束了。黃天化領命、系  
了糸糸。天化曰、弟子下山退魔家四將、故此如將家裝束耳。怎敢忘本。子牙曰、魔家四將乃左道之術也、須緊要  
提防。天化曰、師命指明、何足懼哉。子牙許之。黃天化上了玉麒麟、拎兩柄槌、開放城門、至轅門請戰。四天王  
正遇炳靈公。<sup>(28)</sup>

父の武成王黃飛虎との再開を喜び、そのために道士に相應しくない派手な服装をしたり、なまぐさを口にしたなど  
を後に姜子牙に咎められる。このように軽率な行動が見られる。また、ここで、「四天王遇炳靈公」とあり、黃天化  
のことを炳靈公と言い換えていることもわかる。

小説第四十一回の冒頭部で魔家四將との戦いに出陣の時の様子が詩に描かれている。

悟道高山十六春 仙伝道術最通靈  
潼関曾救生身父 莫耶宝剑斬陳桐  
束発金冠飛烈焰 大紅袍上繡团龍  
連環砌就金鎖鎧 腰下絨縵左右分  
兩柄銀錘生八楞 穩坐走陣玉麒麟

奉命特来収四将 西岐城外立頭功

旗開拱手黄天化 封神榜上炳靈公<sup>(29)</sup>

ここで前回の武器に加え、新たに二本の錘と玉麒麟という靈獣に乗っている。また下山時と出陣時の最後に「炳靈公」とあり、黄天化を炳靈公と明確に記述している箇所がしばしば見うけられる。このように話の中にたびたび炳靈公の名前が登場することから、当時の炳靈公はどんな性格の神であるか、広く民衆の間に知れ渡っていたと考えられる。そして下山し周軍營に到着したときの黄天化の様子を車本『封神榜』では以下のようにかいている。

黄天化、走着撥雲往下看、哨見岐山関下城。小爺一見心歡喜、輕輕落在帥府中、下了麒麟往上走、因此上、太公觀看吃了一驚。書里表明說現在、姜子牙、举目留神看分明。只見小爺黄天化、齒白唇紅一道童。眉清目秀天連海、鼻如大小口如山頭戴臥雲冠一頂、身穿仙衣是大紅。<sup>(30)</sup>

ここでも黄天化の容姿の美しさが再び強調されている。その後の魔家四将との戦いで両者が対峙した時に黄天化の風貌が書かれている。

頭戴束髮冠一頂、赤金抹額嵌双龍。身穿鎖子連鎖甲、内襯征袍赤通紅。九吞八扎金獸面、勒甲絲通紅赤縵。兩扇征袍遮馬面、玉帶一条束腰中。左右佩定弓合箭、殺人刃柄盛睛中。面如敷粉差多少、凜凜身才八尺零。眉清目秀

この場面でもやはり容姿端麗であると書かれている。車本『封神榜』で黄天化が登場する場合、ほとんど「眉清目秀」という形容が付け加えられており、何度も美青年であると強調して描かれている。これは前に述べた「趙州參軍之妻」などの説話の内容とも関連があるのだろう。また結んだ髪と腰にさげた袋も黄天化を表す象徴的な特徴である。そして魔家四将との戦いが始まると鑽心釘を用い四人を次々と倒していく。ここに小説『封神演義』と車本『封神榜』は大きく描写を異にしている。小説『封神演義』では、魔家四将との戦いに一度敗れ、崑崙山に連れていかれ、道德真君に助けもらう。その後再び下山し二度目の戦いで勝ちを収めるのであるが、車本『封神榜』では、一度も敗れることなく勝利する。また小説『封神演義』と比べて、魔家四将との戦いの場面が少し詳しく描写されている。この魔家四将との戦いが『封神演義』の中で黄天化が最も活躍をする場面であろう。

この魔家四将との戦いの際に、黄天化は道德真君より玉麒麟を授けられる。『封神演義』の中に靈獸などの乗り物に乗って登場する仙人や道士などは多数いる。それらは高位の仙人であることが多い。だが、若い道士である黄天化が麒麟という神聖なものに与えられる事は、黄天化は民衆の信仰を集める神であったと思われる。さらに車本『封神榜』では、しきりに黄天化の容姿の美しさが強調されているのは、一般に炳靈公といえは美青年の神という認識があったのだろう。

その後、聞太師とともに進軍してきた辛環と余慶の二人と戦うが、この時初めて玉麒麟についての記載がある。小説『封神演義』では次のように書かれている。

話説二人交鋒約有三十合、有辛環氣冲牛斗、余慶怒髮冲冠、二将来助太師。黄天化見二将来助戰、把玉麒麟跳出陣外就走。余慶不知好歹、隨後追來。黄天化挂下双錘、取火龍標回首一標、打下落馬而死、一魂進封神台去了。辛環見余慶落馬、大叫一声、吾來了。肉翅飛來、錘鎖往頂上打來。辛環是上三路、黄天化錘是短兵器、招架上三路不好擋抵、把玉麒麟跳出圈子就走。這玉麒麟乃是道德真君坐騎、足有風雲、速如飛電。辛環不見機、趕來、被黄天化將攢心釘發出、正中肉翅、辛環在空中吊將下。來聞太師見辛環失利、忙催動殘兵、望東南敗走。黄天化連勝二陣、也不追趕、領兵回西岐報功去了。<sup>(32)</sup>

この玉麒麟は元々は道德真君が乗っており、とても早く移動するとある。このように玉麒麟は本来、道德真君のものであった。また高位の仙人だけが乗り物に乗っているが、黄天化も道德真君から貸し与えられ、その後ずっと乗っている。『封神演義』の中で何かしらに乗り登場している者は多くいる。だが麒麟に乗っているのは、黄天化の玉麒麟と太師聞仲の墨麒麟だけである。これは、太公望の四不相のように、『封神演義』の中だけに見られるものではなく、麒麟という有名な神獣に乗っていることから、黄天化つまり炳靈公の特殊性を伺うことができる。

魔家四将との戦いの後も黄天化は何度も出陣し、たびたび戦果をあげる。だが魔家四将との戦いの時はど活躍する場面は見られなくなり、敗走する場面もたびたび見られる。第六十九回「孔宣兵阻金鷄嶺」での高継能との戦いに敗れ黄天化は封神される。

且説黄天化只聽得殺声大作、不察虚実、催開玉麒麟、冲進左營、忽聽砲響、高継能一馬当先、負夜交兵、更不答



話、麟馬相交、鎗鏃併挙、好黄天化。両柄鏃只打的鎗尖生烈焰、殺氣透心寒。二将乃是夜戦、況黄天化両柄鏃似流星不落地、来往不沾塵。高継能見如此了得、掩一鎗、撥馬就走。黄天化催開玉麒麟趕來。高継能展開蜈蚣袋、也是黄天化命該如此、那蜈蚣捲將來、成堆成团而至、一似飛蝗。黄天化用両柄鏃遮擋、不妨蜈蚣把玉麒麟の眼下叮了一下、那麒麟叫了一声、後蹄站立、前蹄直豎、黄天化坐不住鞍、撞下地來、早被高継能一鎗正中脇下、死于非命、一魂往封神台去了。可憐下山大破四天王、不曾取成湯寸土。<sup>(33)</sup>

この戦いで、高継能はハチを操る蜈蚣袋を武器に戦う。袋から出たハチに驚き、暴れる玉麒麟から黄天化は振り落とされる。そこを高継能によりとどめを刺される。今回は魔家四将の時とは異なり清虚道德真君に助けられることなく封神される。ここでもやはり、戦いに出る時は玉麒麟に乗り両手には槌を持っている。『封神演義』のストーリーの中で黄天化が登場するのは、この第六十九回で最後である。その後、黄天化が登場するのは、先にも述べた第十九回「姜子牙帰国封神」である。

今奉太上元始勅命、爾黄天化以青年尽忠報国、下山首建大功、救父尤為孝徳、未享荣封、捐軀馬革、情実痛焉。授功定賞、当從其厚、特勅封爾為管領三山正神炳靈公之職。爾其欽哉。黄天化在壇下叩首謝恩、出壇而去。<sup>(34)</sup>

ここにあるように黄天化は生前の活躍により「三山正神炳靈公」に封じられる。そして生前は道士であったが封じられた後は神となる。また「三山正神炳靈公」の「三山」とは「北京東岳廟」<sup>(35)</sup>では「龍虎山、茅山、閻皂山」とされ

ている。『封神演義』本文で、この黄天化を炳靈公に封じたという記載に続き黄飛虎が封じられる。

今奉太上元始勅命、而黄飛虎遭暴主之慘惡、至逃亡于他国、流離遷徙、方切骨肉之悲、奮志酬知、突遇滄池之劫、遂罹凶禍、情実可悲。崇黑虎有志濟民、時逢劫運。聞聘等三人、金蘭氣重、方図協力同心、忠義志堅、欲效股肱之願。豈意陽運告終、齎志而歿。爾五人同一孤忠、功有深淺。特賜榮封、以是差等。乃敕封爾黄飛虎為五岳之首、仍加敕一道、執掌幽冥地府一十八重地獄、凡一應生死轉化人神仙鬼、俱從東岳勸對、方許施行。特敕封爾為東岳泰山天齊仁聖大帝之職、總管天地人間吉凶禍福。爾其欽哉。毋渝厥典。<sup>(36)</sup>

ここで黄飛虎は泰山天齊仁聖大帝すなわち東岳大帝に封じられる。『封神演義』のストーリーで両者は父子関係と東岳大帝と炳靈公の親子関係を強調するため神に封ぜられる様子が続けて描かれて登場しているのである。

『封神演義』での黄天化は、話の中での扱われ方や活躍の度合いなどから考えてみても、重要な登場人物であることがわかる。魔家四将相手に代表される戦いの場面や、玉麒麟に乗っている事など、高位の仙人のような扱いをされている場合もある。また話の中で黄天化のことを炳靈公としている部分が何箇所も見られることから、炳靈公がいかなる神か広く認知されていたのだろう。これは『封神演義』が書かれた明代に炳靈公が盛んに信仰されていた事の一端を示すものであろう。

## 結 語

炳靈公あるいは泰山三郎の名前が記されている様々な資料によると、初期の頃は幸福をもたらす神、冥界の神とされており、小説の中では容姿端麗と描かれるなど様々な性格を見て取ることができる。これは封号を与えられるたびに、炳靈公の神格が上がり、それに併せて炳靈公も重視される神となり、説話や小説に登場する時には位の高い神として描かれるようになったのであろう。この事が特に顕著にみられたのが『封神演義』である。黄天化の活躍が多い事は炳靈公信仰の隆盛を反映してのことと思われる。だが明代以降、炳靈公信仰は次第に衰え始め、民国期には岱廟の炳靈殿も取り壊されるなど、その信仰が廃れていったこともわかる。そして現在では、ほとんど祀られる機会がなくなってしまうている。これは炳靈公の神格が他の神に移り、その新しい神が広く信仰されるようになり、炳靈公信仰が衰退したのかもしれない。これは推察に過ぎず、今後、検証していく必要がある。

### 注

- (1) 汪子卿撰『泰山志校証』周郢校証(黄山書社 二〇〇六年)三三三―三三三頁。
- (2) 魏収撰『魏書』(中華書局 一九七四年)卷五十二列伝第四十「段承根」一一五八頁。
- (3) 秘書集成編纂委員会編『秘書集成』第八卷(团结出版社 一九九四年)、「分門古今類事卷四異兆門下」〔盧登無官〕一八二―一八三頁。
- (4) 李昉等編『太平広記』第六卷(中華書局 一九六一年)二二七三―二二七四頁。
- (5) 前掲『太平広記』第七卷 二四七九頁。
- (6) 馬端臨撰『文獻通考』卷九十 郊社二十三(台湾商務印書館 一九八七年)八二三頁。
- (7) 俞樾撰『茶香室統鈔』卷十九 春在堂全書。

- (8) 李滄撰「統齊治通鑑長編」(中華書局 一九八〇年)第三十四冊 哲宗元符二年 一一二二五頁。
- (9) 金榮「泰山志」(湯貴)、劉慧主編「泰山文獻集成」第七卷 泰山出版社 二〇〇五年 三九一頁。
- (10) 李豐楙・王秋桂主編「新刻出像增補搜神記大全」(台灣學生書局 一九八九年)一一〇頁。
- (11) 施耐庵著「水滸伝」舒伴齋校注(長江文芸出版社 二〇〇〇年)五八〇〜五八七頁。
- (12) 前掲「秘書集成」第八卷(分門古今類事)卷四異兆門中「段弼得錢」一八一〜一八二頁。
- (13) 馮夢龍編「古今小說」(人民文學出版社 一九七九年)許政揚校注「史弘肇龍虎君臣會」二二二〜二三八頁。ここでは大意をとって訳す。
- (14) 前掲「古今小説」二一六頁。
- (15) 前掲「古今小説」二一六頁。
- (16) 洪惟助主編「崑曲辭典」(台灣 國立伝統藝術中心 二〇〇二年)七四頁。ここでは大意をとって訳す。
- (17) 馮夢龍編著「醒世恒言」顧肇倉校注 下冊(人民文學出版社 一九六二年)六五六〜六七三頁。ここでは大意をとって訳す。
- (18) 前掲「醒世恒言」六五八頁。
- (19) 前掲「醒世恒言」六五九頁。
- (20) 同前注(19)
- (21) 許仲琳編著「封神演義」(上海古籍出版社 一九九二)第九十九回「姜子牙掃國封神」七〇四〜七〇五頁。
- (22) 前掲「封神演義」第三十一回「聞太師驅兵追襲」二〇七〜二〇八頁。
- (23) 車王府曲本「封神榜」(人民文學出版社 一九九二)第一百十九回「行軍帳天化救父」九七九頁。
- (24) 「吳越春秋」夫差内伝第五 干將莫耶。中国古代の名剣。春秋時代の故事である。この「封神演義」の時代より後の出来事であり、時代が前後している。「封神演義」の作者の時代感覚の曖昧さがうかがえる。
- (25) 前掲「封神榜」第一百十九回「聞太師驅兵追襲」九七九〜九八〇頁。
- (26) 前掲「封神榜」第一百十九回「行軍帳天化救父」九八〇〜九八一頁。
- (27) 前掲「封神演義」第四十回「四天王遇炳靈公」二七〇頁。

- (28) 前掲「封神演義」第四十回「四天王遇炳靈公」二七一頁。
- (29) 前掲「封神演義」第四十一回「聞太師兵伐西岐」二七二頁。
- (30) 前掲「封神榜」第一百五十三回「黃天化下山助周」一二八五頁。
- (31) 前掲「封神榜」第一百五十四回「周軍臣上城觀陣」一二八九頁。
- (32) 前掲「封神演義」第五十二回「絕龍嶺聞仲掃天」三五四頁。
- (33) 前掲「封神演義」第六十九回「孔宣兵阻金鷄嶺」四七九～四八〇頁。
- (34) 前掲「封神演義」第九十九回「姜子牙掃國封神」七〇四～七〇五頁。
- (35) 北京市朝陽區文化委員會編審「北京東岳廟」(中國書店 二〇〇二年) 五二～五三頁。
- (36) 前掲「封神演義」第九十九回「姜子牙掃國封神」七〇五頁。